

アルベルト・メルッチ教授の講演と座談会の記録

講演：「社会運動は政治にのみ還元されない

— 民族性、文化性、そして「私は誰なのか？」問題」

1994年9月11日(日) 午後2時～5時 於 北海道大学

座談会：「アルベルト・メルッチ教授、「ヤイユーカラの森」を訪れ、

アイヌ文化に触れる」

1994年9月10日(土) 午後8時～11時 於 ヤイユーカラ

の森

訳者解説 — 講演の翻訳を終え、座談会を振り返って

アルベルト・メルッチ教授を北海道にお迎えして

近年、わが国の社会学者の間で注目されているイタリアの社会学者アルベルト・メルッチ教授が、1994年9月に初めて来日した。これは、一橋大学が企画した国際シンポジウム「多文化主義時代における世界と日本」(9月20, 21日)の報告者の一人として招待されたものである。この機会にメルッチ教授は、日本国内のいくつかの地域を訪れ、その地の大学で講演したり、日本の社会学研究者と交流した。またその地域で起きているいくつかの問題にも直に接した。

今回、ここに収録したのは、メルッチ教授が9月10日から12日までの間、北海道に滞在された際に催された二つの企画、すなわち、北海道大学を会場として行われた講演とその前夜に「ヤイユーカラの森」事務局を会場としてアイヌの方々も交えて行われた座談会の記録である。講演は北海道大学教育学部と札幌学院大学社会情報学部の共同主催で、また座談会は両者に加えて「ヤイユーカラの森」の御協力を得て実施されたものである。準備は、座談会に出席している両大学の社会学スタッフ有志を中心に進められた。

メルッチ教授は、9月10日に新千歳空港に到着後、ウトナイ湖畔で昼食をとってから平取町を訪れ、アイヌ側の反対を押し切った形で進められているダム工事現場と「二風谷アイヌ文化博物館」を、その後、夕張の旧炭鉱地区にも赴き、炭鉱労働者の住宅街をそれぞれ視察した。さらにその夜、札幌市内の「ヤイユーカラの森」事務局での座談会に出席した。過密といえる日程であり、たいへんお疲れであるにもかかわらず、メルッチ教授は夜11時近くまで他の参加者の発言に熱心に耳を傾け、また自らの考えを精力的に述べて下さった。この座談会が活発な意見交換が行われ、参加者にとって得るところの大きい非常に有意義な場となったことはこの記録を見ていただければわかる。

その翌日、11日午後の北海道大学での講演は、当初は「日常生活の民主化と北部同盟」という予定になっていたが、実際にはここに載せた通りのものとなった。見られるようにイタリア北部同盟の話題は全く登場しないので、訳者の責任で「社会運動は政治にのみ還元されない — 民族性、文化性、そして「私は誰なのか？」問題 —」とさせていただいた。また1～9という段落分けとその見出しも内容から判断して勝手に付けさせていただいたものである。講演の後

には若干の質疑応答があったが、割愛した。

なお、講演のテープ起こし作業は、富良野在住のキャロル朝比奈さんに行っていた。この記録は、その英文を基に私が訳出したものである。人文学部の坪井主悦先生はキャロルさんへの紹介の労をとって下さったばかりではなく、私の疑問に応じて丹念にテープを聞き直して確認して下さい、いくつかの貴重な指摘を賜った。またメルッチ教授のすぐれたお仕事を日本に紹介する論文「システム社会の現代的位相 — アイデンティティの不確定性を中心に」(『思想』1991年6, 7月号)の著者である山之内靖先生(東京外国語大学)にも私の拙い訳出原稿を見ていただいた。山之内先生は、ていねいに眼を通して検討して下さい、いろいろと貴重な修正を加えて下さった。これら三人の方の手助けがなかったら、この翻訳作業は成立しなかったであろう。この場を借りて厚くお礼申し上げたい。しかし、この訳出稿に関わる責任は私が負っている。何か不適切な点が発見された場合、その責任の一切は私にある。

座談会については「ヤイユーカラの森」の計良さんが事務局を会場として快く提供して下さい、座談会に参加した他の会員の方々もそれぞれにお忙しいのにボランティア精神で快く集まって下さった。

このように多くの方々の厚い御協力を得てはじめてこの記録は出来上がったといえる。主催者の一人として深く感謝申し上げる次第である。

(文責 井上 芳保)

* NOTE

アルベルト・メルッチ (Alberto Melucci) のプロフィール: 1943 年生まれ。現在、ミラノ大学社会学部教授。「新しい社会運動」を研究する社会学者であり、臨床心理学者でもある。英文での著作として、1989年にフィラデルフィアで出版された、Nomads of the Present — social movements and individual needs in contemporary society, edited by John Keane and Paul Mier, Temple University Press. がある。この部分訳が、山之内靖ほか編『講座社会科学の方法第II巻 20世紀社会科学のパラダイム』(岩波書店)に収録の第10論文「民主主義再考」(山之内靖・永易浩一訳)である。これは第5章「日常生活の境界」と第8章「日常生活の民主化」を併せたもの。全訳作業は現在、山之内靖・永易浩一両氏によって進められていると聞いている。Nomads of the Presentの内容を詳しく紹介したすぐれた邦語論文として、山之内靖 1991年「システム社会の現代的位相 — アイデンティティの不確定性を中心に 上・下」(『思想』804, 805号 1991年6, 7月号)がある。また、来日の折りに東京で山之内靖・矢澤修次郎両氏によるインタビュー、「新しい社会運動と個人の変容」が『思想』849号(本年3月号)に掲載されている。

アルベルト・メルッチ教授 講演 (1994年9月11日 於 北海道大学)

社会運動は政治にのみ還元されない

— 民族性, 文化性, そして「私は誰なのか?」問題 —

アルベルト・メルッチ

1. 討論とは問題点が何かを探ること
2. マルクス主義の立場, 集合行為論の立場
3. 二元論的仮説から出発した場合の難点
4. 社会運動の多様性, 差異性, 複雑性
5. 運動主体はいかにして形成されたのか?
6. 「新しい社会運動」論争の認識論的な誤謬
7. 社会のシステマティックな転換と日常生活の重要性
8. 北海道の地と関わる「私は誰なのか?」問題
9. 民族性, 文化性の復権と不平等, 差別の体験

1. 討論とは問題点が何かを探ること

今日の私のお話は英語ですということになっております。私の方は報告を英語で行うことに全く異存はないのですが、御質問やコメントは英語でも日本語でもどちらでも結構です。新原先生がイタリア語に翻訳して下さい。それに私は英語でお答えしたいと思います。

さて、何よりもまず私を本日招待して下さいったことに感謝の言葉を述べさせていただきます。[ただいま挨拶いただいた(記者)]日本における高名な研究者であられる山田教授にお会いする機会を与えて下さった北海道大学の小林教授に感謝しております。私はここに今、いるということ、そして私に探究の機会が与えられたことを本当に幸せに感じております。これはけっして形式的な導入の言葉ではないのです。日本に来たのは今回が初めてです。わずかの間ですが、出来るかぎり、皆さんの国の社会と文化について知ろうと思っております。もちろん日本のことに

ついて関心を持ったり、或いは日本について書かれたものを読んだことはこれまでもありました。日本の社会学研究者たちと接触したり、日本社会とじかに接触するのは初めてです。

これは私にとってたいへん深い学びの経験であります。またこの場は皆さんと共に意見を分かち合い、中心的な理論的問題や我々の社会に関わる経験的な問題点についての或る種の対話を確立していく機会でもあります。そしてまたここは私がこれから報告することに関してアイデアを交換したり、皆さんの反応やコメント、そしてできれば反論をいただけるという意味で私にとりまして思索を深める恰好の場(an ideological opportunity)でもあります。ですからどうか遠慮なく、質問したり、私の提示することについて問題を提起したり、批判したりして下さい。

私は討論することは我々の現在の仕事において最も重要な部分を占めていると思っております。討論とは問うべき問題点が何かと問うこと(asking the right questions)を意味

します。我々は、今、直面している問題に対して多くの回答を有しているわけではありませんし、不幸なことに近代思想の遺産は現在について、また我々、地球的な規模の社会の窮状について何ら答えを用意してくれるわけでもありません。

しかし、こうした中で私にとって重要な第一歩は、正しく問題を提起することだと思います。というのも問題の提起は我々の探究や思考や感じ方に一つの方向性を与えるからです。討論は学術的な実践としての儀礼的なものなのではけっしてなく、今日の科学的探究にとって重要なものなのです。討論したり、意見を交換したりするための我々の能力を高めていくということ、これこそ望むべきことなのです。

2. マルクス主義の立場、集合行為論の立場

現代社会とそこにおける社会運動の役割に関わる、私の一般的概念のいくつかについて手短かに要約させて下さい。これは報告の最終部分とつながりを持つものです。

私はこの報告をより特殊なトピック、すなわち北海道地域のように、民族的、文化的なアイデンティティにおいてすでに多様性を有している地域社会の持つ問題点に関連づけて行いたいと思います。この一般的で理論的な導入部は現代の世界における諸々の民族的、文化的なアイデンティティの役割についての深い省察 (specific reflection) への序論となるのです。

私は小林教授に私自身のそう古くはない時期の論文のコピーを作ってくれるようお願いしました。それは一連の議論について把握するのに有益な参照ポイントとなるものです。この論文の中に皆さんは私の意見のいくつかをみることができましょう。またそれは皆さんの独自で個人的な省察を鼓舞するものでありましょう。

私は過去 20 年間にわたり、集合行為 (collective action) の問題について仕事をして参りました。私の主たる関心はいつも集合行為を扱う場合の西欧近代思想と社会学理論の根本的欠陥を、ことに社会学的思考が集合行為を扱う時の二元論という遺産を乗り越えることにありました。集合行為は常に構造ないしシステムという言い方によって説明されてきました。いかなる人々が実際に共に行動するかも社会的条件に関連づけて或いはまた社会システムの束縛に関連づけて説明されてきました。これが現代社会学の強固な伝統になっています。

もし我々が古典的なマルクス主義の理論の立場をとるなら、社会的条件、より正確には階級的条件が、集合行為の確実なる源泉であり、基礎であります。人々が共に行動しているところを、或いは共に抗議したり、宣言したりしているところをごらんになったら、あなたはそこに社会の中で彼らに与えられている社会的条件を見るでしょうし、社会的束縛をみるでしょう。

もう一つの集合行為の扱い方は特に少なくとも 1950 年代までの北アメリカに伝統的なものです。それは自らの行動について、人々がどう発言しているかを捉えようとしますし、その行動を動機づけた価値観、信念は何であるかを捉えようとします。そして人々にたずねることになります。「なぜあなたはかくかくしかじかのことをするのですか。考えて下さい。なぜこのような方法をとっているのですか」と。そして、これへの回答を記録します。むろん社会調査の経験的な伝統において、これらの二つの側面、これら二つの理論的な遺産は相互に関連しています。

3. 二元論的仮説から出発した場合の難点

これら二つの間に橋を架けようとする多くの試みがありました。ですが、一方にシステ

ムがあり、他方に動機、価値観、信念を有した行為者が存在しているというこの二元論的仮説とは、基本的には近代的思考の主たる遺産なのです。もちろん、行為の見地からするなら、この二元論的仮説から出発した時には、いつも理論的な袋小路、難問に入り込んでしまいます。

もしあなたがシステムティックな構造の側に立つならば、社会構造の中のどこに人々が位置づけられるのかはたいへん明快です。しかしながらその特殊な条件から人々がいかにしてかくかくしかじかの方法で行動しているのかを説明することはたいへん困難です。これは古典的なマルクス主義者の問題です。というのも、明らかに同じ条件の構造を分かち合っている人々であってもその全てが彼らのおかれた構造的条件の故にそのように行為するだろうと予期された通りに振る舞う訳ではないという場合において、構造的な階級条件から階級的行為への道筋をいかに説明するかということ、これがマルクスの問題であり続けてきたからです。

このことの故にこそマルクス主義は構造的条件と人々の実際の行為との間の溝に架橋する必要が生じているのです。その結果、確かにレーニン主義との間に或る種のひずみを生じました。私が思うにレーニン主義とはマルクス主義の一つの見事な発展でした。それはけっして或る種の逸脱という訳ではなく、この問題に対する一つの良き答えでした。

この溝が存在しているとしましょう。ということは、構造的条件によって規定されているけれどもその条件通りの意識を有してはいない人々がいるということですが、これらの人々を導いていく第三の部分 (a third part)、つまり第三の行為者 (a third actor)、知識人、政党がこの溝を感じ取るだろう。そして彼らは人々に条件通りの意識を教育し、その結果、人々は階級意識で満ちることになる。こうして人々は彼らの階級的条件に応じて振る舞う

ことができ、階級闘争を発展させることができるようになるのです。[これがレーニンの考えでした (訳者)]。

このマルクス主義の古典的問題は集合行為についての我々の理論的アプローチの中にいまだに存在しています。人々の現実的な行為は社会構造や社会システムにおける客観的な規定性から予想するものとは大いに異なっているということ、このことをいかに説明するかという同じ問題に私達はしばしば直面します。

むしろ、もう一つの立場をとり、人々に自らのなしていることについて何を考え、どう感じているかを尋ね、そしてその答えを記録するならば、あなたはそこで、人々は自分がないことに常に気づいているとは限らないからという新たな反論に直面し、身を晒すこととなります。これはいわばブルジョア意識を批判する際のマルクス主義者に強固な議論です。よく知られているように、語られるすべてのことが真実というわけではないという議論です。社会的条件は拘束を作り出すのであり、それゆえ人々は彼らのなしていることの本当の意味を伝えることができるとは限らないし、すすんでそうすることも限らないのです。ですから単に人々に質問したり、単に文書で書かれたものを収集するというやり方をした場合、この反論に出会うことになります。

同じことが、社会運動についての経験的調査者にも起こりうるのです。この二つの思考の方向性は調査の形態においても現れてきます。或る種の人々は社会構造や社会的条件に着目し、また別の或る種の人々はインタビューを実行するのです。社会的行為者の全貌は彼らの言っていることによってその全てが表現されとは限らないのです。彼らは社会的条件や行動に合致しないことをたくさん言います。マルクスなら提示したであろうような若干の虚偽意識がそこにはあります。以

上が、多かれ少なかれ、集合行為や社会運動の研究が直面してきたところの伝統的な難局です。

4. 社会運動の多様性, 差異性, 複雑性

かくして私の問題関心の出発点はこの二元論の遺産を克服することに向けられました。私は人が初発において(集合的行為の)単一性(unity)を求めなければ、最後まで単一性を見い出せないであろう、と私は確信していました。もし社会的行為者について二元論の仮説から出発するならば、やはり同じ問題に行き着いてしまうでしょう。ですから、我々が行為を固有な意味を持つ、システムティックな或いは構造的な拘束に基づくものであっても同時に単一的な源泉だとみなした時、その場合にのみ、最終的に単一性を見い出すことができるのです。社会的行為は、人々が رفتり、言明したりしていることに意味を与えると同時に、システムティックな或いは構造的な拘束の範囲内で表現されるものと仮定しなければならぬのです。

そう仮定してこそ我々は人々の行動を意味豊かなものとして、かといってまったく自由なものでもないし、まったく開かれたものでもないとして理解しうるのである。これが社会学的な運動に関わる私の一般的な関心です。集合行為はそれ自身において、また行為者自身にとって意味豊かなものであるが、しかし或る種の構造的な領域によって限界づけられた行為形態として研究されなければなりません。この一般的方向性に関する話はこれでとどめておきましょう。

集合行動(collective behavior)、行為、社会運動の理論に関する次の話題は、社会運動が社会学の文献において取り扱われている方式と関係があります。社会運動は主に19世紀の労働者階級にその出自を有しています。社会運動や集合行動についての研究は1960年代に至るまで主として産業社会の枠組みとい

う位置づけに準拠しています。これらの社会運動研究では、集合行為をする人々は、いわゆる「単一性」を保持しているという暗黙の仮説をおいていまして、社会運動は一元的現象(unitarian phenomema)とみなされてきました。例えば、労働者階級の運動について語る際に、多くの種類の階級的行動があるにもかかわらず、我々はいまだに固有名詞的な「労働者階級運動」という単一主体の運動があると考えてしまいます。この考えは、一つの主体がその全ての本質を備えていると言わなければならないのと同じです。私はこの遺産にいくぶん形而上学的なものを見出してしまいます。なぜならそこには、社会的主体についての、集合的に行為する人々についての実体論的な仮説が存在しているからです。我々が経験的には集合行動の形態として観察するものが、実際には分析者の手にかかるという一種の実体論的な単一性とみなされます。私に言わせれば、これは経験的な行為者が現実を示している多様性、差異性、複雑性に合致しないのです。

5. 運動の主体はいかにして形成されたのか?

私の第二の関心は、集合的な主体という考え方を解体し、脱構築すること、また分析枠組みを見い出し、精緻化することです。これによって、現実を構成している意味や方向性や水準の多元性について集合行為の経験的現実に対して差異づけることができるようになるでしょう。

私は或る現実を所与の現実としては考えません。例を挙げて言うならば、1960年代から70年代の女性解放運動、60年代の学生運動、1950年代あるいは1890年代の労働者階級の運動などについて、それらの主体は所与のものであるとか、すでに構築されていたとみなすのはやめましょうということなのです。私の問題はその主体が社会的プロセスを経てい

かに形成されるのかということにあります。我々が集合的行為者に帰属させているところの単一性 (unity) は本質的に形而上学的現実ではなく、我々社会学者が理解し、説明するのは社会的プロセスの結果なのです。集合行為の構築についてのこの問題設定は、なぜそれほど重要なのでしょうか。もし我々がこのように運動の主体を単一性 (unity) に帰属させないならば、集合行為の発達と成果——これらは思考や意志、見解や価値観を有した一人の実質的な中心人物によるものではなく、運動の異質な部分や構成の間にある多くの過程や相互作用や交渉の結果なのですが——を理解することが遙かに容易になるからです。

出発点としてこの集合行為の単一性を仮定した時によく起きることは、単一の集合行為者によって産み出された言説を捉えがちになることです。言説というものは運動内のエリート、社会組織の中のリーダーによって産み出されるということをよく知っているにもかかわらず、こうして我々はこれらのリーダーの言説を運動体そのものの表現にほかならないものと受け止めてしまいがちです。この言説を脱構築し、それがいかに多くの複雑な社会的過程の結果であるかということを見つればいいのにそうせずに。

この私の第二の問題関心を要約すれば、社会運動の単一性を脱構築ないし解体するために分節化された一連の分析的道具立てを発展させる必要性ということになります。むろんのことですが、私はこの方向についていくらかの貢献をして参りました。しかし私のような道具立ての全てを供給することが私の仕事であるとは必ずしも考えておりません。必要なのは調査の主題、入念さや省察といったものです。方向や方法的な問題点を示すことなど、いくつかの例を供給することは私にとって重要です。しかし、社会的行為者たちの形而上学的な考えから社会的行為の過程的

で建設的な見解 (a processual and constructive view) へと向かっていくためにはたいへん長い道のりが存在しているとも考えております。

6. 「新しい社会運動」論争の認識論的な誤謬

第三の点はこれらの全ての考え、これら全ての理論的問題関心は行為の現代的な推移を観察することによって支えられ、鼓舞されたものであるということです。もちろん、集合行為のより古い形態についての比較研究からも鼓舞されましたけれども、多くは集合行為の現代的形態の研究と観察によって鼓舞されました。

現代的な運動 (Contemporary movement) は私の第三の研究対象ですが、これに関する私の仕事は、「新しい社会運動の理論」(a theory of new social movements) として扱われています。とはいえ、これが私の仕事として重要なものであるにもかかわらず、「新しい社会運動」(new social movements) に重きをかけることが必ずしも肝心というわけではありません。過去 10 年ないし 15 年にわたって、新しい社会運動は非常によく論じられてきましたし、それに対する反論も巻き起こってきました。

私は確信しているのですが、この論争には認識論的な誤謬があります。新しい社会運動を批判する側の多くの人々は、新しい社会運動には新しいものは何もない、現代の運動の特徴の多くは過去の集合行為の形態の中にも見出されるものであると指摘しています。また他の批判者はこれらの運動は新しい政治を指向しているがゆえに新しいのであるという事実を強調しがちです。彼らはこうした最近の運動を理解するにあたって集合行為の日常生活的水準がたいへん重要であるということをあまり考慮していないのです。

両者は誤解の上に立って批判を展開してい

るように私には思われます。私は私の取り上げた集合行為の属するとされる水準や次元を仕分けしなければならないという条件つきでこれら二つの立場に全く同意することができます。私の第二の点を強調するとすれば、我々は集合行為者を単一性としては扱わずに、単一性として現れるものは、実は社会運動の異なる水準、要素、成分の複雑な、そしてひきもきらない相互交渉を通して達せられるものだという考えを受け入れるべきだということです。この点が受け入れられるとすれば、実際の運動 (empirical movement) は新しくもなく古くもなく、しかし常に同時に新しくも古くもあるものとなります。

実際の運動は、或る社会の異質な成層、異質な階層、異質な地理的分布に属する社会生活の要素や成分をその経験的な諸特徴において結びつけています。経験的で歴史的な社会においては、社会運動は彼らの行為を未来に向けて突き出すエネルギーを過去から汲み取っているものであり、それ故にその定義においていつも古いのです。とはいえ、ただ古いだけではありません。問題は集合行為のこうした異なる水準を経験的にではなく、分析的に際立たせ、分離するところにあります。

それゆえに私は、新しい社会運動についての論争はまちがっていると思います。それは「集合行為の現代的形態には、それを理解するにあたって従来のそれとは異なった新しい枠組みを必要とする要素や水準が存在するのではなかろうか」という正当な問いを志向していません。もちろん、この問いに対する私の答えはイエスです。現代の集合行為には、その諸要素や水準についてみるときに産業社会や資本主義社会の旧来の枠組によっては理解しえないものがあります。これが新しい社会運動の新しいさです。全体としてみればそれは新しくないでしょう。しかしこの新しい集合的行為の構成要素には異なった枠組みを参照することなしには理解できないものがありま

す。

7. 社会のシステムティックな転換と日常生活の重要性

私の意識的な努力はこの新しいさを表現するためのいくつかの思考の道筋を提示することに向けられてきました。この新しいさは現代社会——情報社会とかポスト産業社会とかいろいろ言われていますが——のシステムティックな転換を参照することによって表現できると私は考えています。しかしながらそのことは新しい形態の権力や支配、新しい形態の集合行為が出現してきたことをも含んでいるのです。こうした新しい抗争は集合行為における経験的な意志表示の内部に発生し、浮上してくるのです。私が新しい社会運動に関心を持つのは、それらの発生がまさに新しいというからではなく、産業社会の伝統的な枠組みの範囲内においては説明のつかない局面を有しているからです。

むろん現代的な行為の形態についての理解をさらに進めるためには我々は多くの研究を必要としています。現代社会についてのよりすぐれた理解、この社会が何であるかについてのよりすぐれた理論、集合的行為者についてのよりすぐれた理解を我々は必要としております。社会運動というテーマは——それは誰も一般的問題とは言わないでしょうから——一連の一般的問題を指向する方法としては限界を持っているというべきでしょう。「社会」についての一般的理論を供給することはたいへん困難であるし、実際にそれは不可能であると私は思います。しかし最初に述べたように、何が問題点なのかと問うことによって我々は意味ある方向で仕事を開始することができます。そうすることで、我々は社会の或る部分についてや社会の特定の領域や現象について理論を供給することはできるので

私の過去 20 年にわたる努力において後悔

が残るとした場合、その最たるものは、私の社会運動の分析が政治に還元されていたことです。新しい社会運動についての私の研究は専ら政治的効果という観点から解釈されてきました。それはそれで重要なことではありませんが、それでは新しい社会運動の本質的な次元を捉え損なってしまうのです。本質的な次元というのは人々の主要な経験である日常生活のことです。この水準においてこそ新しい形態の権力は構成されていますし、生活の中に浸透している新しい形態の支配もまたそうです。

現代の社会運動を政治的な行為という意味合いにおいてのみ考えるのでは最も重要な点を見失ってしまいます。かくして私はこの還元主義的な見解についてたいへん批判的になっております。社会生活とは政治よりも遙かに豊かで広いものです。政治とは社会生活の限られた部分であるにすぎないことを認識しなければなりません。

8. 北海道の地と関わる「私は誰なのか？」問題

この報告の最後に、現代の世界における民族性と文化性について語ることにします。これはここ北海道の地と大いに関わるものです。皆さんがここで経験しておられることはより一般的な地球的な規模で起きている問題の一つの恰好の事例 (a metaphor) となっているのです。

民族性と文化性に関わるアイデンティティは現代の抗争において中心的な役割を演じていると私は考えています。それは何故でしょうか。つまり複合的システム (Complex systems) — 私はそれを高度に分化した、迅速に変化する社会、消費能力以上に生産できるように情報を基本的資源として使用する社会という意味で使っているのですが — は、それ自体を機能させるために個々の諸要素を供給しなければなりません。個々の諸要素とはサ

ブシステム、グループ、個々の主体を指しています。複合的システムは、それぞれの要素が、システムの信頼できる部分として行為することを可能にするように資源を供給しなければなりません。

システムが情報を基礎としている場合、そのシステムは各パートが情報を受け入れ、伝達し、加工し、解読する能力を持っている限りでのみ機能することができるのです。さもなければ、そのシステムは崩壊してしまうでしょう。システムは個々の人間に対して一連の資源を供給し、そのことによって個々の人間を理解し、判断し、評価し、意志決定しうる自律的な行為主体へと仕立て上げなくてはならないのです。

一方では、個々人は教育、情報、自由、権利、福祉に関連する資源等々を供給されることによって自律的な主体になっていきます。これらの諸資源や他の福利のようなもの、消費現象に関する能力などが豊かな社会を特徴づけているものです。

他方では、システムは分化されていけばいくほど、崩壊に至らないためには統合を強化しなければならなくなります。同じように、個人的な制御の基盤をなすシステムティックなプロセスも強化されねばなりません。それには外的な制御だけではなく、個人の生活や動機や意識や感情や遊びなどの深層構造におよぶ制御が含まれています。これらはポスト産業社会的意識 (post-industrial consciousness) と呼んでよいでしょうが、このポスト産業社会的意識は現代的システムの根本的な矛盾と関わらざるをえません。一面では、それは個々人に自律、自己決定、自己反省という資源を供給しています。ですが他面では、それは個々人を最奥の深層領域におよぶ制御 (the deepest forms of control) へと送り込むものでもあります。

こうした条件の下では、「私は誰なのか？」との、行為の主体者としてのアイデンティ

ティに関わる問いは、システム論的に言えば (in systematic terms), 中心的問題となります。そして個人にとってはこの問いに対する回答を提出することはたいへん難しくなっています。というのもシステムが著しく分化して、たいへんすばやく変化し、我々が使用できるよりも多くの資源を供給してしまうからです。我々は自分が誰なのかけっして正確には知りません。我々はいつもこの問いに対する答えを探しているのです。

民族的、文化的な出自と伝統は、一つの既製品の回答 (an already-made answer) を与えてくれます。というのもその回答は堅固なものであり、過去へと深く根を下ろしているし、地理的に位置づけられているからです。文化的伝統と言語の豊かさということだけではなく、母なる地球、我々が安心して暮らすことのできるよう保護してくれている領域との関わりということをもそれは有しているのです。民族的、文化的な伝統が成立している場合には、「私は誰なのか?」という問いへの回答は極めて簡単に手に入るものなのです。

以上のことは民族的、文化的運動が過去 20 年から 30 年にわたって復権してきたのは何故かについて、その大まかな理由を明らかにしてくれます。私の主たる答えは、システムの闘争の諸分野に変化が起きて、パーソナルなアイデンティティに直接的に影響を及ぼすようになったというものです。というのも民族的、文化的な伝統は諸個人の再解釈によって堅固で信頼できる回答を容易に供給するからです。この基礎なしに一つの答えを作り上げることはたいへん困難です。

もしあなたが、若くて、都市にいて、情報やコンピューターの世界に関わって仕事をしているポストモダンの人間であり、さらに両親がなく、出自が明らかでなく、国際的な言語としての英語以外に話せないとしたら、この問いに答えることはたいへん困難ですね。もしあなたがコミュニティに属しており、伝

統的な言語を有しており、家族や先祖を有しており、領域も所有していたならば、少なくとも自らのアイデンティティについていくらかは答えることができますでしょうけれど。

9. 民族性、文化性の復権と不平等、差別の体験

導入部で述べましたように、民族性、文化性の復権とは申しましても、その経験的な歴史的な形態は、このような意味に尽きるものではありません。それらは他の多くの要素から構成されています。ここでは以下の三つの要素だけを指摘しておきます。

第一、通常、現代国家の歴史的構成においてこれらのコミュニティは、政治的に強力な差別と不平等の下におかれてきたということ。彼らは極めてしばしば境界的条件に追いやられて生きてきました。近代国家が構成される経過の中で、周辺部に追いやられることとなったこうしたコミュニティはやがて近代化の過程が始まると、経済的成長という問題に晒されたのです。そして、この経済成長過程において彼らは中心から隔離されている距離の度合いがどれくらいかを思い知らされたのです。そして彼らはあからさまな形で不平等と差別をはっきりと体験することとなりました。彼らはより大きな平等と正義を手に入れようとして、また中心部の社会の利益に自ら与かろうとして戦いを始めたのです。

第二の重要な要素は、近代国家の構成の過程において、これらのコミュニティが政治的な舞台と表現の過程から除外されたという点です。国家の構成とはまさしく彼らの存在を抹消してしまうということに他ならなかったのです。今や先進的な社会の政治的な舞台が広がり、開かれている時に、これらのコミュニティは彼らの固有の生活に関する決定についていかなる権限や参与も有していないということがわかってきています。そして、どのような国家形態に関わっているかによってそ

の急進性の度合いを異にしながらも、彼らは権限や参与を求めています。国家が集権的で閉ざされたものであればあるほど自律という課題は急進的になるのです。国家が開かれ、民主的で、表現の機会が与えられていけばいほど、この課題は地域や地方の自治の中で発展する見込みがあります。

第三の、そして最後のたいへん重要な要素は、文化の保存と刷新という課題です。小集団の文化は通常は征服され、周辺化され、除外されます。その結果、言語それ自体が失われ、文化的なギャップに晒されます。そこでこれらの運動にとって、それらの文化、すなわち言語、教育、文学、芸術、工芸、その他のものの保存と刷新が、このとき極めて重要な課題になります。

私は、これらの諸要素を明確化し、分離することがたいへん重要であると思っております。もし我々が分析をこれらの水準の一つにのみ「平板化」(“flatten”)してしまうならば、我々は理解に失敗する危険を冒すこととなります。状況、経験的な境遇、制約、国家の体質に応じて、一つの行為、一つの次元が、他の行為、他の次元に広がっていくでしょう。これこそは経験的な調査の出番となる領域なのです。残念ながら私はアイヌやアメリカインディアンについて語る十分な材料を持っていません。というのはこれらは経験的な対象だからです。

これらの要素が特定の社会構造や国家の形態や経済的社会的な結合等々に従っていかに結びつくのかを理解することが社会学者の本来の仕事です。これは私にはたいへん重要と思われる分析の様式です。文化的（言語的問題）水準に還元したり、政治的（自律と政治的参加）水準に還元するという運動の古典的な分析方法と大いに違うところだからです。

私の考えるところでは、この分節化された分析用具のセットによって、運動の複雑性のより良き理解は可能となるのです。運動のい

くつかの部分が一つの方向に行き、別の他の部分が他の方向に行くということ、またこれらの部分が社会的、構造的、政治的条件に応じていかに相互交渉し、同盟し、新たな単一性を見出しうるか否かという事実が明らかになるのです。

あまりにも長い説明となってしまいました。が、これによって私の一般的見解が皆さんに明らかになったとすれば幸いです。質問やコメントを大いに歓迎します。ご静聴ありがとうございました。

【訳 井上 芳保】